

「臨床検査データブック 1997-1998」

自治医科大学学長 高久 史磨 監修
東海大学医学部長 黒川 清
神戸大学教授 春日 雅人 編集
東京大学助教授 北村 聖

聖路加国際病院副院長、看護部長

井 部 俊 子

このたび出版された「臨床検査データブック 1997-1998」は、小型でパワフルで新鮮である。

本書は“臨床検査の考え方と注意事項”、“検査各論”、そして“疾患と検査”の3部構成である。

まず第1部で述べられている“データ判読の基礎”、“基準値・基準範囲の概念とその正しい利用法”、更に“保険請求上の注意事項”は25頁程度にまとまっているので、ぜひ読んでおきたいものである。

第2部の“検査各論”は本書の主要な部分であり、600を超える検査項目が網羅されている。ここでは各検査項目の基準値、測定法、検体量、検査日数を示すとともに、検査結果の異常値の各レベルごとに考えられる様々な疾患を〔高頻度〕〔可能性〕〔対策〕という見出しの下に簡潔に述べている。更に引き続いて“異常値がでるメカニズムと臨床的意義”、“判読”、“採取保存”、検査項目によっては、薬剤服用時の検査値への影

響、保険上の注意が解説されていてわかりやすい。

第3部の“疾患と検査”では270を超える疾患を取り上げている。ここではまず病態を簡単に紹介し、更に“診断・経過観察上のポイント”を簡潔に述べている。

本書によって、臨床検査と各疾患の診断における2つのアプローチが可能になるとされている。1つは、患者の訴えや臨床病状から特定の疾患を推定して臨床検査を行い、診断の確定や重症度の判定に至るアプローチであり、もう1つは、逆に検査値の異常を見つけ、その異常から疾患の診断に至るアプローチである。

こうしたアプローチは医師だけが行うべきものであると考える臨床家は少ないだろう。臨床ナースは“何も考えずに”検体採取することはありえず、そのデータについて無関心ではいられない。ナースの検体採取技術や保存がデータそのものの精度を決定付ける場合も少なくない。稚

拙な技術が患者に対して大きな不利益を招く結果となる。

医療はチームで行われてこそ成果を上げると考えるならば、看護職も看護業務の中で大きな比重を占める臨床検査に強くなければならない。そういう意味で本書は臨床ナースにとって、本格的な“すぐれもの”になるであろう。カバーをはずすと金文字に黒の表紙が素敵である。

山田詠美のエッセイに、暇つぶしに辞書を読むという話があった。“最初はばらばらとページをめくっているのだが、やがて、熱中してしまい、気が付くと辞書を読むということ自体が目的になってしまい、そのために時間を費やしている状態になる”という短文を思い起こさせるデータブックである。

●B6 頁528 図17 表67 1997
定価(本体4,500円+税) 7400

医学書院 刊(☎03-3817-5657)